



TITLE:

<批評・紹介>夫馬進著「中國善會
善堂史研究」

AUTHOR(S):

斯波, 義信

CITATION:

斯波, 義信. <批評・紹介>夫馬進著「中國善會善堂史研究」. 東洋史研究
1998, 57(2): 342-350

ISSUE DATE:

1998-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/155201>

RIGHT:

批評・紹介

夫馬進著

中國善會善堂史研究

斯波義信

一

本書は最近のわが中國史研究の學術が放った大きな快學の一つである。善會・善堂とは、各種の似たような慈善や公益を営む集團・團體の汎稱であり、會則・會員・會費・會産などを備えて、目的意識をもって持續的に運営する civic な組織である。強いてこれを分かりやすい比喩でいえば、ロータリークラブのごとき善學を推進する團體・組織といえるだろう（本書九六頁）。中國でこうした公益・福祉についての社會運営（ソーシャル・マネージメント）なかなか郷紳主導のそれが際立ってくるのは明末・清代、つまり舊帝國社會がその最終段階に迎えた大きな變動の時期においてであった。ただし、こうした制度や活動は舊體制とともに滅んだとは必ずしもいえず、一九世紀末葉からは西洋的要素を加味しながらつづき、夫馬氏がいうごとくに現政權の誕生とともに消えたのでもない。評者の知るところではいまのタイ國、マカオ、マレーシア、フィリピン、米國などでまだ歴然と機能しており、その最大のものであるバンコクの報德善堂（佛教系）は一八九六年このかたの歴史

を刻んでいる。⁽¹⁾ いわば「中國人性」に歸してもよいような、この種の活動が見せる強靱なバイタリティーは、本書の主眼からは一應は逸れるのでここでは横に置きたい。

さて明末・清代にわたって顯然となった「郷紳主導の社會運営」というテーマ及びその事實關係は、中國社會の近代化前夜の流れ、これにプラスして近代化に向かう流れを見定め、またこれを西中比較史の座標から眺める上でも、ひとつの大きな考察の鍵を提供するものである。この種團體・結社のおこりが東林黨人士における陽明學の「萬物一體の仁」の實踐に動機づけられていたとすれば、島田虔次氏が唱え溝口雄三氏がフォローされたところの、中國自生の「近代」意識の芽生え、その消長を探る鍵でもある。また「社會史派」流に定義すればそのいわゆる「問題史」の重要な一角に擬せられるべき話題である。にもかかわらず仁井田陞氏の『洪江育嬰小識』（東文研、東洋文庫藏）を用いた論攷、そして酒井忠夫氏の『中國善書の研究』（第一章 明代の教化策とその影響、第二章 明末の社會と善書）という、先見性に満ちた研究などを除くと、史實自體が長くネグレクトされてきて、一九六〇～七〇年代の事典、入門書の類には言及が皆無であった。この當時としては在中國の史料の存在状況が分からず、その一方でこの頃の解釋論を制していた「郷紳支配論」にせよ「資本主義萌芽論」にせよ、農村關係そして經濟關係を偏重して、都市問題自體も都市社會層の問題も研究がおくれた領域であったという事情もこれにあずかっていた。

夫馬氏はこのテーマにトータルに挑んだ文字どおりのパイオニアであるのだが、同氏は一九八二年頃から今日に至る一〇餘年間、非凡な集中力と情熱を傾けて必要な史料をほぼ網羅的に博搜し、史

料を批判し、史料學を樹立し、そのベースに立つて明末・清代三〇〇年にわたる公益事業の中國風な社會運営についての諸相、流れ、消長、意味變化をコンパクトな論述（本文八四七頁）にまとめた。

本書を手にする事でこのテーマの奥行き・廣がり、豊かな「實質」を伴って傳わってくる。テーマの「實質化」に即して同じフィールドでいうと、仁井田陞、酒井忠夫、今堀誠二、田仲一成、何炳棣氏らの先達的な業績を思わせるものがある。たまたま夫馬氏に相前後してこの問題に取り組んできた臺灣の中央研究院中山人文社會科學研究所の少壯學者、梁其姿女士が、同じく一九九七年、『施善與教化』と題する好著（三八〇頁）を著した。²⁾この書は夫馬氏とは獨立にそして獨自の構想を加えて成った力作である。期せずして同一テーマをめぐる二著が現れたところに、現世代學者の問題史的焦點の一端が示されている。こうした現在の關心事に兩著がどういう寄與をしているかを交えながら、以下に本書の内容のあらましを傳えたい。

二

夫馬氏は當初から明末における民衆意識の變革に關心を寄せていたが、白蓮教徒の運動を調べる内に、こうした動きの因果や大義が必ずしも農村起源の經濟闘争一元のみでは解けず、一六・一七世紀に訪れた社會の商業化、都市化が醸し出した複合化した諸關係、そしてエリートのリーダーシップにおける龜裂、具體的には地方で中央政府を代表する縣官と、紳士階層のなかでも「地方公議・縉紳公議」を代表するなかんずく生員層が、地方社會の「義舉・公事」領域における公益秩序の運営をめぐって、極端な場合には政府との衝

突（士變）にさえ至ったという状況に逢着した。もちろん巨費を要する公益事業は必ず政府援助の發動に仰ぐという意味合いでは、この衝突は民権の成長などでは毛頭ないが、一種の「義舉・公事」の形で世論形成が用意されてきたことに夫馬氏は注目した。その議論ですでに言及されていた同善會、これに類する民間主導で運営される公益團體が明末・清代にいかにか成長したか徹頭徹尾追求したのが本書である。すでに述べたように問題が未知であり全體像も隠されていたので、氏は地方志・官箴・書院志・文集・筆記の涉獵から着手し、さらにアクセスが可能になってきた中國の各種圖書館を訪書の射程におさめた成果の一端として、徵信錄なんかなく會計報告帳簿レベルの一次史料を掘り起こし、また宣教師の報告、Chinese Repository、新聞の報道をも網羅して重厚な史料から證言を引き出す萬全の配慮をしている。これがなかんずく本書の大特色なのである。

第一章「善會、善堂以前。明代の養濟院を中心にして」は、明末に至る中國の救恤事業運営の流れの概述である。この部分は明の官製の救貧組織——養濟院が官製のゆえに實效に乏しく、このブランクをついて善會・善堂が誕生するという文脈で説かれている。すなわち救貧にせよ救荒にせよ、共に古典期いらい爲政者の守備範圍と目されてきたものの、非日常的でスケールの大きい救荒には歴代政府はおおむね熱意を注いだが、日常的な養民、具體的には「鰥寡孤獨」へのケアは、農本主義政府の努力目標と認定はしながらも、一義的には家族・近親・郷里のケアにまかしてきたという官・民分業の習わしが示される。その上で、官製のケアについては北朝の給田方策、南北朝・隋唐での佛教的發想に由来する官製施設の誕

生に一步の前進がみられたこと、唐半ばから宋代に流民・難民の發生という新事態に面して、流動する貧民に「常平乞丐の法」で對處する方策を軸に、廣惠倉（院）、居養院、安濟坊、慈幼局、養濟院、漏澤園などがいっせいに起こったこと、元・明にかけて養濟院一本に收斂して畫一普及した反面で、明初から里甲制に表裏しながら本籍主義、農村主義が貫かれたために、宋代風の落魄層・流動階層へのケアが後退し、また官僚的畫一主義がはびこった事情が指摘される。

このくだりはもう少しふくらませてはしなかった。(1)氏は「鰥寡孤獨」、「乞丐法」コンセプトの消長という興味深い展望を提供する。梁女士の著書のなかの「通史」部分は、後發の利かもしれないが、古代このかたの「貧」「賤」「窮」コンセプトの社會通念上、實體上、法律上の消長、また曖昧化を、唐宋變革、宋・明末の商業化、人口問題に觸れながら説き、同時に「土」の身分、コンセプトの消長にも言及している。エリート風の道德判斷からすると「貧」自體はむしろ中立なもので、ゆえに清高な「貧士」は非難などはされない。宋の義莊、明清の善會・善堂において、貧士の救恤が其の運営のレバートリーに擧げられてきた事情は、ゆえに若干の説明を要するだろう。ついでにいうと、「貴」はともかく、本富・末富・姦富など「富」のコンセプトも古今にわたり消長し、そして古くは「四民」、唐末・宋からは「六・八民」、明では「二十四民」等といわれるようにすらなつた（梁、五三頁）。「救貧」といってもコンセプトが古來一定していたとは限らないだろう。(2)「鰥寡孤獨」の類の救済は、たしかに政府も一應の射程に入れているが、この分野の運営の主體は夫馬氏も示すように家族・近鄰・宗族・政府であ

つた。明清における人口の激増をして社會の分化と動搖を考えると、地域・地方によつては「お上」の記録に留められなくて、實は家族・近鄰・宗族のレベルがケアしていた「無依」人口は、かなりの數に達していただろう。夫馬氏のこの部分の「通史」は、制度に絡めて最小限の言及に抑えられている憾がある。(3)同じく「通史」として宋代の救貧施設を顧みるくよりは、善會・善堂の祖型の認定に議論が絞られて、惠民藥局の普及とか、宋代の常平倉・常平新法（青苗法）・社倉、さらには清代の常平・社・義倉の昂揚の事實については「官製」のカテゴリーに入るための省略かもしれないが、言及がない。しかし救荒・救貧を含めて舊中國における「社會運営」への公私の熱心さのアップスとダウンスを展望するという話ならば、熱意の表明に時期毎の周期性があり、さらにいえばステイト・アクティビズムとエリート・アクティビズムのそれぞれが、それぞれ別の周期性をもつて興亡しまた交替したことも一言でいどは紹介してほしい。(3)明末が社會經濟の一大轉換期であり、エリート・アクティビズムの一大發揚期であつたことはおおむねそのとおりであろう。しかしこの圖式の下では、北宋における未曾有のステイト・アクティビズムの顯示、また南宋における朱子ら郷社に焦點を移したエリート・アクティビズムの登場、そして清代一八世紀における國・エリート雙方の公益の實踐の同時並行といったニュアンスは、その位置づけに苦しむことになる。

三

本書の第一章末尾の「呂坤の養濟院政策」から第二章「同善會の誕生」までは、祖型としての同善會の發生事情を詳述して餘すこと

ろがない。陝西巡撫の呂坤が一省全域に及ぼそうとした養濟院の改革案は、その生起した時期でも、救貧の具體案としても、善會の濫觴ともいふべき内實は備えていたものの、トップダウンの方策に終わって善會に固有の結社性・自發性の片鱗をも示さず、理念もまた官方の當爲の發露にとどまった。これに反して一五九〇年代に中州の河南省ではじまり、わずか半世紀ほどの内に江南デルタを中心として、浙江、福建、江西、河南、山東、北京の主に都市部に廣がった善會・善堂は、特殊明末・清初の該地方・地域が生み出した歴史所産であった。明末の東林黨士を發會のリーダーとするこの組織は、中・下層の鄉紳プラス地方官から成る親睦・爲善散財の結社として起り、やがて道義的な教化と濟貧とを動機と理念に据えるようになった。チャリティーの組織としては數世紀は先行する民間の俗會に通ずるものがあるが、東林派の鄉紳が自覺的に儒家的な社會秩序の作興に向けて實踐にのりだした、という「主觀的側面」が見落とせないとする（夫馬、梁氏）。夫馬氏の展望では、「善與人同」孟子「つまり善學をなканずく集團で實踐する」ということは、陽明のいう「萬物一體の仁」によつて、地方（縣）レベルでの和氣の共感をもちたらすことに目的がある。そこでは貧者に散財して果報としての「福」を求めるに止まらず、爲善爲仁を通じて和氣の廣がりを期する意味合いを帯びる。溝口氏風に敷衍すれば、萬物生生の太平から轉じて康有爲風の大同の理想に向かう、中國的な公共と均平とを合わせた「公」を唱える理念の流れと讀んでも良いのかもしれない。この立場からして救貧は無差別ではなく、道義的に選擇的であった。當初の善會・善堂はこうした集團であり、客觀的には江南中心、都市中心に廣がった。會のリーダーは教化・教導に力を入

れ、支持する會員層は爲善應報觀念によつて後援し、やがて會がシステムとして定着普及して行く内に、生思想者の個人的魅力やそのリードが背面に去つて、爲善應報の中國の民間福祉團體（善會・善堂）の形が固まつてきたとする夫馬氏の説明は、たいへん分かりやすい。

草創期の會は百數十數百人の會員で成り、年に定期（四回前後）に集會し、俗講を講じ、會員が推薦し調査登録した被濟者に向け認定資格に應じて給付をし、報告（徵信錄）を會員に周知した。運営は會規に従ひ、集會毎に會費を徴するか會産から支出し、司講・主會を選定した。活動の及ぶ範圍はせいぜい一府一州なかんずく一縣内、鎮單位のものもあつた（一縣の公事、一八三頁）。この部分で兩氏とも善會・善堂の起りと普及を人口問題・社會不平等問題に一元的に歸することを避け、そうした客觀情勢よりも主觀動機に重きを置いていることは、慈善の明清的展開を知る上で示唆に満ちている。ただし當初の同善會運動が放生會、育嬰堂、掩骼會、普濟堂、清節會などへとそのレパトリーを増幅してゆく経緯については、兩氏それぞれに獨自な説明を用いている。ともに明末・清初の三教調和の風潮を認めるのであるが、夫馬氏は會の「結社性」に官方からの自立を讀む立場から、一面では宋代の前例との非連續を強調し、また一面では佛教の影響を低く評價する。梁女士の論法は、善會の展開において儒士そしてその集團の自己修養・儒家價値の發揚願望を一貫して重んずる點では夫馬氏並みであるが、清朝入關後の結社への嫌忌、順治・雍正二帝の佛教信仰に言及しつつ、通俗佛教の普濟・生生の念、通俗道教の陰陽・積徳の觀念は大儒や儒生（生員層）の行動にも相應の影響を持ったという立場であり、ゆえに宋

の先驅との斷絶點を前者の政府主導、後者の民間主導の差に求めるものである。この意見の分かれはともかく、明末の紹興の保嬰局に萌芽し、清一代に善會の骨格ともいふべき位置を占めた育嬰堂の展開と普及、運営の詳細については（清後半に興起した清節堂、また同じく清後半に廣がりを見せた惜字結社の論述同様に）おもに夫馬氏が開拓した領域である。

四

第四章「清代前期の育嬰事業」、第五章「清代松江育嬰堂の經營實態と地方社會」、第六章「清末の保嬰會」は清一代の育嬰堂の顚末を述べ、本書の柱をなしている。一六五五年に揚州の富商の蔡連が純然たる民營施設として始めた育嬰堂は、江浙を中心に府城↓縣城↓鎮市へと著しい普及を示す。雍正二年（一七二四）になると上諭によって北京に育嬰堂・普濟堂が設けられ、この時點から全國への普及が促されるとともに、當初の純民辦方式が變形したり、地方資源の乏しい地域では運営に官營色ないし官督民辦色が勝つてくる。

民辦期（一六五五―一七二三）の育嬰堂は、政情が稀にみる安定成長をめざし、江南都市經濟が擴大をとげるという背景のもとに、明末の善會にみられた政治色が退く一面で、結社性・自律性を保持しながら質的な前進をとげた。會首・資産管理人・贊助者は富商および郷紳の上・下層から成り、會産・商捐も運営方式も充實して幼児の委棄問題に組織的に取り組んだ。江浙の大都市の堂は孤兒院というより寧ろ育子施設をその本領とし、豊かな資力をテコに近邊の在宅乳婦に寄養させる方式が多く、資力に乏しい縣・鎮レベルの堂は捨て子を暫時預かった上で、たとえば蘇州など一〇〇キロも隔た

る大都會の堂まで送り込む（留嬰・接嬰制）というネットワークを作った。つまり都市ハイアラキーに即した地域的な對應である。このスケールの大きい寄養制では嬰兒の生存率に難があつたにしても、この時期では世界的に見ても出色の事業であつた（その「先進性」を江戸期のそれと比べた論述は、近年の江戸時代人口史の成果への参照が十分でなく、いささか片面的である⁽⁵⁾）。

これにつづく一七二四年の上諭から乾隆末までの育嬰堂・普濟堂などの「官僚化」について、ニュアンスの差はあれ兩氏とも正・負を交えて評價する（第八章「善堂の官營化と善舉の徭役化」）。正とは國費・官捐の注入、制度的・地理的擴散など、負とは硬直・畫一・不正・自發性の退化などである。だが、この邊の説明は國と社會との二分法對置に還元し盡くされないところがあるのではないか。國もエリートも同時に強くなつたという點では、一八世紀は珍しい時期であらう。一時的ではあるが常平倉の類がまた農地の拓殖が昂揚しただけでなく、國の公益策はステップ・ダウンして通常はマイナーと目し、ゆえにエリートにゆだね勝ちであつた公益にまで官督民辦を及ぼそうとした、ともいえる。たしかに長期の流れで見ても、あるいは宋、あるいは明末から連綿とつづくエリートの役割上昇の波動はまぎれもない。ただし國とエリートの間の守備範圍の畫定自體は中期波動の周期を交えて消長を重ねたのが、その實狀であつた。

五

以下の限られた紙幅のなかで、第六章「清末の保嬰會」、第七章「清代の恤養會と清節堂」、第九章「杭州の善舉連合體と都市行政」、

第十章「上海善堂と近代地方自治」、第十一章「上海の都市近代化と義塚問題」、終章という長大な(三一九〜七五四頁)クライマックス部分を語る羽目に至ったのは、ひとえに評者の不手際のせいである。この部分は明末(草創期)、清初(民辦成長期)、雍・乾(官督民辦普及期)以上は評者の命名)を経たのちの、清代後半における、都市化の先進地域に展開した、善會・善堂という汎稱に繰り込まれた、郷紳主導型の社會運営組織についての、文字どおりトータルな敘述である。ステイト・アクティビズムの熱意は、嘉・道そしてアヘン戦争・太平天國の亂を経てソフト・ダウンし、條約體制をテコに西洋式公益・慈善のチャレンジを受けるなかで、郷紳主導の公益の社會運営は客觀的には未曾有の擴展と成長を見せ、結果として近代地方自治のおこりにつながってゆく。

このエリート・アクティビズムの「盛期」部分に對する夫馬氏の研究史上の大きな貢獻は、テーマの「實質化」に巨歩を刻んだことのほかに、仁井田・今堀・根岸氏らがガイディング・メタファーとして慣用してきた「ギルド」コンセプトを、「善舉集團」コンセプトに引き戻し、その効果として問題の「全體性」と「實體性」をより良く見えるようにしたことにある。この點で、夫馬氏も、また梁女士も、「理念の歴史」という思想史の手法をその論述のライト・モチーフに据えていることに注目してもよいだろう。

夫馬氏が究明した盛期の善會・善堂には、その特色として糾集連合化・巨大化(善學連合體Ⅱ夫馬、總合型善堂Ⅱ梁)、その傘下における各種善舉の機能別・目的別の分化、社會運営上の情報公開(徵信錄)性の成長(Ⅱ夫馬)、儒士中下層クラスのふくらみに伴う理念的・物質的救済問題の浮上(清節堂、惜字會)、が讀みとれ

る。連合化・巨大化と機能分化は、社會關係とくに都市的生活環境の複合化に即應しそれと裏裏するものであろうし、公開性原理が育ったことは、アソシエーションの成長を裏書きしている。政府の社會運営力が褪色するのと反比例して「自治運営」色が増幅したことは理解しやすい。にもかかわらず生監層のフラストレーションを反映するともみられる清高な節婦の旌表、彼女らの幼児らに義塾での教育を供與すること、あるいはまた清代において文昌信仰の官祠への繰り入れに對應するような惜字結社を看板とする善會が廣がり、これらがむしろ清の後半にその勢いを増してくること、そして巨大連合型善學團體といえども、ストリートに都市ギルドの利害代表グループが「總董」メンバーの席に就くのではなく、あくまでも福祉團體を標榜する善人集團の統率で持續的な存続を保ったごとく、こうした形とイデオロギーを正面に掲げつつ全體の活動にアーチをかける儒士精神は確實に生きていた。「理念の歴史」手法のメリットがここに示されている。その反面、夫馬氏が善會・善堂の歴史は清代でおよそ終わったと展望し、梁女士もその『施善與教化』で筆を西洋インパクトの大幅な侵入以前で止めているのも、こうした論法の當然の歸結なのである。

清節堂の議論では、夫馬氏のそれにテーマ開拓者の苦心が讀みとれるし、梁女士のそれは最近の女性史研究の動向を組み入れた工夫が示される。また梁女士の惜字會をめぐる考察は、儒士底邊の「教化」「善學」運動の背景として、貧富に分極する社會のなかで、「清高なる貧士」の論はもはや道徳的に「中立」ではあり得ず、切迫した生存問題がらみの道徳主張に轉じたこと(「儒家化」から「儒生化」へ)を見出し、さらに惜字の動機に觸れて、科學文化の底邊に

かねて生じてきた文昌信仰などの通俗道教との融合を指摘する。

善學連合體の實體と運営に徵信錄類を駆使して迫った部分は夫馬氏の獨壇場であり、壓巻であり、かつてこれをマーチアント・ギルドになぞらえて扱った先人たちの論放を史料面でも、社會構造の讀みとりでも大きく越えている。巨大連合體の代表としては、杭州善堂と上海善堂（上海同仁輔元堂）の事例が詳述される。杭州は浙江省の首位都市プラス長江下流における傳統的な商工都市網の頂点を蘇州と分かち合う地位にあり、上海は縣城に止まりながらも同治以後では長江下流の首位經濟都市に成長した。

夫馬氏の分析によれば、一八八三年時點の杭州善堂は一二の目的別の組織を擁し、その中で普濟堂は三、同善堂は一〇のブランチを抱えていた。すなわち一六六六年からつづく育嬰堂を柱に、分化しまた個々の會の獨自性を溫存させる傍らで糾合を上げてきたもので、一八二二年から二人の「總董グループ」を擁する集團運営を發足させた。その事業の幅はまさしく「市役所」の公益・福祉といつてよく、資金源も運営も「民捐民辦」と形容できる。總董グループは湖南の洪江（仁井田）、湖北の漢口（W・ロウ）などの既知の事例では外地からの寄留者に組織を牛耳られていたのに反して、土着人士であり（外籍幫でない）、同業ギルドの利害代表の機關でもなかった。また知府を通じての監督もそれなりに強かった。一方、上海善堂も杭州同様の集成と機能分化をとげた巨大組織であり、太平天國前に存した一〇餘の各種善堂が一八五五年に同仁輔元堂という集成善堂になったものである。リーダーに當たる「司總」集團二八名のなかに船商一〇名、錢商數名を交えていることが特色であり、また民捐民辦方式が杭州の善堂よりも徹底していた。上海善堂

もあくまで善學團體として推移したのち、一九〇五年に上海總工程局が誕生し、近代的な *public* な都市行政につながるがゆえに始まって肩代わりがなされるまで、アクティブに機能していた。兩事例とも、運営の要をなす商捐という財源が有力商人層の營業の實績に對するパーセント課徴（いわゆる厘金）で支えられていたという指摘は商業史としても興味ぶかい。

六

「理念の歴史」手法をその背景においたこの善會・善堂研究は、いくつかのブレイク・スルーを提供している。まず史料知識から始めるべきだろう。中國史とくに明清史の史料學は一九八〇年代から一變して、俄然としてかなり理想に近い狀況になった。なかなしく戦前・戦中期に若干の先人だけがアクセスしてきたようなローカル・ヒストリー史料が目前に公開されてきた。本書もW・ロウや、M・B・ランキンその他多數が積極的に拓きつつあるローカル・ヒストリー分野のなかの、ひとときわ出た産物に他ならない（わが國で近年いう地域史とは意味合いが違ふ）。多分最大に受益する分野は社會史だろう。極端にいえば、新出史料にベースを置くことで既成の社會史の語り口を全面的に檢證し直して、その再認識やら再發見やら大きな修正を施すことが可能になってきている。本書が善學・公益という、一世代前の入門書では見落とされたテーマに正面から挑んで成果を挙げ、結果として比較史的な「ギルド論」の效用にもチャレンジしているのも、こうした研究動向の變化ないしは進化の所産なのである。

夫馬氏が本書において明末から清一代にかけて、民間主導の公益

事業團體の、組織運営面の起伏を一貫して克明に立證して見せたことは、この期の中國において果たして都市的なコミュニケーションなムーブメントがあり、それがどのように推移したかを考える上で、據るべき確實な足がかりとベースベクトイブを提供した。明末にいわゆる第二次商業革命が生じたこと、清代一八世紀に全國的性質の人口膨張と市場形成と物價運動の景況が存したこと、そして清後期にも國內商業は先進地に限って言えば、その擴大を停止したわけではないことは、ほぼ知られている。W・ロウの漢口の研究(第一、第二冊)は、ローカル・ヒストリーという「場面」を設定することによって、これまでマクロの断片知識に止まっていたところの、商業化に伴う地方社會(湖北・湖南)の成熟について、明末—清一代にわたる長期の見取り圖を提供した。その第二冊以降でロウが漢口鎮の都市行政を實質的に擔った外籍商人集團の指導力を、「ブルジョア・パブリック・スフィア」の登場と表現し、その追隨者を生じたことから、九〇年代初期の論争に至ったことは周知の通りである。⁽⁷⁾

U・ハバーマスが唱えるこのコンセプトの含意は、一方で世論を形成しつつ政府の介入に抵抗するコミュニケーション運動を考え、その一方で民主制樹立後もその存立を脅かす政府の介入と大衆消費文化の肥大を訴えるものであるし、前者はM・ウェバーの「プロテスタントの倫理」流の含蓄を秘めるのであるから、この類比を中國にじかに及ぼそうとするロウらの試みは、この一點については勇み足の憾がある。夫馬氏の本書が刊行されたことで、われわれは中國的な都市「自治」ことにその理念の流れについては、今やより明確な定義と展望を持つに至ったといつて良いし、この書を得た今となっては、コンセプト論争自體が空しい響きにみえてくるのは、わが國に

もよくある抽象論議の後の氣分に等しい。

ではギルド論の修正はどうであらうか。夫馬氏は思想史家の下地があり、比較經濟史の用い方につき、なんとなく肌合わないところがあると見受けられる。この氏のスタンスがかえって本書の成功の因であることはすでに何度も述べたし、今の新しい史料状況、中國自體の變化狀況に立つて見たとき、かつての概念上のメタファーにこだわらない立場もまた賛成である。だが社會經濟史分野では、われわれの使うコンセプトの八、九割がたは西歐史の經驗の歸納から成っているだけに、所詮は比較を用いない研究は考えられないのである。中國的な「公益」の歴史的な變化基準が本書でかなり煮詰まっていたと考えべき事は、今度は西歐がこの中國基準から外れているその程度如何を計ること、これによってより一般的な社會理論にたどりつく努力を續けることである。この意味でR・B・ウォンも指摘するように、「社會契約」、「自然法」などのコンセプトの西中の隔たりは大きいが、「商業革命」、「制度化した公共財産」、「都市文化」、「印刷文化」等々は、相違よりもむしろ相似の局面が多いと見て良いだろう。ギルドにしても、そのエリートつまり文化社會學的な價值の文脈・動機⁽⁸⁾の文脈についてはたしかに相違が目立つとはいっても、ギルド自體を生み出す社會・歴史的脈絡(コンジャンクチャー)は、エリートの存否と常に必ず一致するわけではない。上海で總商會が生まれてくる経緯をみると、新しい要素を攝取しながら新舊を合わせた複合的なアソシエーションをつくる中國人の才能には驚くべきものがある。善堂が總工程局へと變貌してゆくあたりは、近代上海の登場史の流れという問題としてもっと知りたいところである。

最後に「通史」展望について蛇足を述べると、著者は救荒と救貧についてその責めを負う主體として、宗族・近郷・宗教教團・郷紳集團・政府を擧げているが、本書では郷紳と政府の關わりに論述が絞られてしまつて、その意味での全體關係がまだ隠されている。たとえばかの五斗米道における「義舍」、南北朝、隋唐時代の佛教系の「社邑・義邑」(那波利貞氏)、唐宋から元に盛んになる佛教系の「俗會」の類(楊聯昇氏)、宋代以後に華中・華南で普及し強化する「宗族」の力量、これも宋代から目立ってくる「義」の多義分化そして「公心好義」という用法(洪邁)を考え合わせると、たしかに明末から郷紳が主導する社會の「儒化」はすでに明らかであるのだが、その底流を用意し支えてきた社會傳統の流れにも、相應の言及を加えられてはいかがかと思う。ともあれ、以上のコメントはまさに餘分な蛇足であり、十餘年の著者の研鑽を凝縮した本書は、内外の専門家に對して絶大な貢獻を提供する記念すべき著述である事は疑いない。

註

- (1) 方雄普、許振禮編著『海外僑園尋踪』中國華僑出版社、北京、一九九五。
- (2) 梁其姿著『施善與教化：明清的慈善組織』聯經出版事業公司、臺北、一九九七。
- (3) Conrad Schiroauer, Robert Hymes, eds., *Ordering the World: Approaches to State and Society in Sung China*, University of California Press, Berkeley, 1993, Introduction. Pierre-Etienne Will, R. Bin Wong, James Lee, eds.,

Nourish the People: The State Civilian Granary System in China, 1650-1850, The University of Michigan Press, Ann Arbor, 1991. 星城夫著『中國の社會福祉の歴史』山川出版社、一九八八。

- (4) 溝口雄三「いわゆる東林派人士の思想」東京大學東洋文化研究所紀要、七五、一九七八。
- (5) 速水融、宮本又郎編『日本經濟史一、經濟社會の成立』一七一八世紀、岩波書店、一九八八。
- (6) Benjamin Schwartz, "The Intellectual History of China: Preliminary Reflections", in J. K. Fairbank ed., *Chinese Thought and Institutions*, The University of Chicago Press, 1957.
- (7) "Symposium: Public sphere/Civil Society in China? Paradigmatic Issues in Chinese Studies, III", *Modern China*, 19:2, April, 1993.
- (8) R. Bin Wong, "Great Expectations: the Public Sphere and the Search for Modern Times in Chinese History", 『中國史學』三、一九九三：一〇—二五。
- (9) Mark Elvin, "Why China Failed to Create an Endogenous Industrial Capitalism: A Critique of Max Weber's Explanation", in *Theory and Society*, 13, 1984.
- (10) 徐鼎新等編『上海總商會史：一九〇二—一九二九』上海社會科學出版社、一九九一。

一九九七年二月 京都 同朋舎
A五判 八四七—二九頁 二五〇〇圓